

1 むらづくりの主体

- (1) 名称 田代自治会 (任意団体)
 (2) 所在地 えびの市大字末永田代集落
 (3) 地区の規模 集落
 (4) 組織の性格 地縁的集団
 (5) 代表者の氏名、役職及び住所
 氏名：前原 良一
 役職：会長
 住所：えびの市大字末永 2720

2 地区の概要

総人口	農林業 就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地面積	採草放牧地 面積	山林面積	
274人	56人	124戸	1,583 ha	82.9 ha	0 ha	447 ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第Ⅰ種 兼業農家	第Ⅱ種 兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
54戸	31戸 (57%)	19戸 (61%)	2戸 (6%)	10戸 (32%)	7戸 (22%)	12戸 (39%)	12戸 (39%)
地域指定状況				農業地域類型区分			
				市町村		当該地区	
農業振興地域				中間農業地域		中間農業地域	

注1：総人口・総世帯数はH24年3月末の住民基本台帳より作成、総土地面積は図測による概数値、山林面積はえびの市の林野率と総土地面積からの推定値、その他は2010年農林業センサス農業集落カードより作成。

注2：農家数と総人口・総世帯数は出典が異なり、農家数の対象範囲は総人口・総世帯数の対象範囲より狭くなっている。

3 むらづくりの内容及び成果

(1) 地域の沿革と概要

ア えびの市の概要

えびの市は、南九州のほぼ中央に位置する宮崎、熊本、鹿児島県の三県の県境に所在し、総面積 283km² で東西約 26km、南北約 22km、平均標高約 230mの盆地状の田園都市である。

交通網は、JRが2線、国道が3線、さらに九州縦貫自動車道および宮崎自動車道が通り、宮崎方面と鹿児島方面への分岐点であることから、宮崎県の西の玄関口として交通の要衝となっている。

市の南部には、日本で最初の国立公園に指定された「霧島錦江湾国立公園」の北部に位置する「えびの高原」が広がり、これを包むように、韓国岳、甕岳、飯盛山

などの山々が連なっている。

また、市の北部には、九州山脈の南端にある矢岳^{や たけ}、鉄山^{てつやま}などが連なっており、これらの山々に囲まれた市の中央部には南九州最長の一級河川である川内川^{せんないがわ}が西流する「えびの盆地」が広がっている。

えびの盆地では、主として鹿児島県内に分布する「田の神さあ」^{た かん}（冬は山の神となり、春は里に下りて田の神となって田を守り、豊作をもたらす神様）信仰が見られ、水稻栽培のほか、和牛繁殖、肥育、乳牛、養豚などの畜産業が盛んである。

平成 22 年 4 月に宮崎県内で発生した「口蹄疫」の際は、えびの市でも疑似患畜が確認され、農畜産業はもとより多方面に多大な影響が及ぶこととなり、地域一丸となった消毒作業等に取り組んだ結果、6 月 4 日には清浄化が確認されたものの、その後も厳しい状況が続くこととなった。

しかし、平成 24 年 10 月に行われた「第 10 回全国和牛能力共進会」においては、えびの市から内閣総理大臣賞の受賞牛を輩出するなど、着実な復興が図られているところである。

イ 田代集落の概要

田代集落は、えびの盆地の南西辺縁部に位置し、地区内で管理する湧水を利用した水稻栽培や、天宮台地上部での野菜栽培、畜産業等が盛んな地区である。

集落総世帯数 124 世帯のうち、44 %にあたる 54 戸が農業を営んでおり、そのうち、約 7 割が兼業農家である。

集落内の 82.9ha の農地では、主に普通期水稻を主体とする複合経営が行われており、水田においては、水稻以外に飼料作物の作付が、畑では、露地、施設園芸が盛んで、里芋やほうれん草を始め、ピーマンやイチゴなど多種多様な経営が展開されている。

また、水稻についても減農薬・減化学肥料による特別栽培にも取り組むなど、高品質米の産地として、県内屈指の高い栽培技術を有している。

(2) むらづくりの動機・背景

江戸時代、当集落を領地下とした薩摩藩では、困窮する藩財政を立て直すため、開田を奨励し、当集落に湧き出る豊富な水に目を付けた当時の人々が、米作を行うため、この地に移り住んだのが当集落形成の始まりである。

しかし、当時の利水技術では水不足が深刻であり、明治時代初期には、集落内にある天宮神社^{あまみやじんじや}付近の水源から天宮台地の地下を通じる手掘りの地下水路^{あまみやずい}（天宮隧道^{どう}）を建設することにより、生産安定に大きく寄与したと伝承されている。

以後、水と土地に対する畏敬・感謝の念は、湧水池や農地を始めとする集落資源とともに脈々と集落住民に引き継がれてきたものの、農業生産や生活環境の基盤整備の遅れなどから、次第に若者の離農や集落からの流出が進み、今後の営農の継続、集落機能の維持に対し、農業者個々の不安感が強まっていた。

そのため、昭和 50 年頃、住民が安心して営農し、暮らせる集落の実現のため、

自治会が中心となり、「営農維持」「資源保全」「情報発信と交流」の3つの目標を立てて活動を開始し、まず、災害復旧事業により、度々崩落していた「天宮隧道」の補強工事を実施した。

この事業の実施により、住民の営農維持への意識が徐々に変化し、地区内に散在し、区画も狭小で、生産効率が低いほ場を整備しようという機運が高まっていった。

平成4年度から、集落総意で市内の他地域に先駆け、「中山間地域農村活性化総合整備事業」に取り組み、従前の未整理田から30a区画へのほ場整備と用排水路施設整備、同時に簡易水道設備、道路網の整備、水源である「陣の池」の周辺環境整備等が計画的かつ一体的に行われ、現在の農村集落環境の基盤が構築された。

この基盤整備の過程における換地作業や集落の話し合い等を通じ、集落内農家の意思疎通が図られた結果、集落の農地は集落で守るといった意識が芽生えることとなり、そのことが、現在の集落営農の取り組みに向けた礎となったとともに、集落の活性化に向けた現在のむらづくり活動のスタートと言えるものとなった。

(3) むらづくりの推進体制

(推進体制図は○ページ「5 添付資料・・・」を参照)

田代集落の住民が、安心して営農し、暮らせるむらづくりの実現のため、自治会が核となり、主に以下の組織が、有機的に連携を図り、むらづくり活動を推進している。

ア 田代集落協定

「中山間地域等直接支払制度」に取り組む組織として、平成12年8月に協定を締結した。

集落内の農業者7名で構成され、集落内の条件不利農用地1.2haと、これに係る道路、水路の保全管理を実施している。

イ 田代ホテル湧水の里保全クラブ

「農地・水環境保全向上対策事業」の推進母体として、平成19年3月に結成された。

農業者45名に加え、非農家組織である地区婦人部・高齢者クラブ・子供育成会・消防団などから構成されており、農地の状況把握、施設点検補修、地域ぐるみの地区内草刈り、泥上げ等を実施している。

事業の交付対象は25haであったが、以前から交付対象外の25haを含めた50haの管理を行っており、もとより、湧水の恵みに対する集落内の共通認識があったことに加え、地域ぐるみでの活動体制が整ったことから、事業第2期対策からは、交付金交付を卒業し、独自に取り組みを継続実施している。

ウ 田代農用地利用組合

平成19年10月に設立され、前原良一組合長を中心に11名で構成されている。

集落の営農意識は概して高いものの、地区内の対象面積25haのうち約4haの農地

については作業を受託し、耕作放棄地を発生させないための取り組みを行っている。

エ ひまわりロードプロジェクト

「田代ホテル湧水の里保全クラブ」における取り組みが開始されたことを契機に、平成 21 年 4 月、高齢化しつつある自治会幹部の助言により、集落内在住の若者の連携と世代間交流の促進、地域活性化に取り組むことを目的に発足した。

自治会長によれば、「当時は兼業が常態化する中で、自らの青年時代には普通にあった家どうしの気軽な往来が少なくなっていることに危機感を覚えた。青年層に一定の裁量を与えて、自由な発想の下で、集落活動を支えてもらいたいという気持ちからの提案であった。」とのことである。

この取組は、農家・非農家に係わらず、集落内在の若者（年齢制限等はなし）であれば、参加が可能であり、現在、集落への U・J ターン者や新規就農者を含む 23 名（年齢構成 21～44 才・うち女性 6 名）で活動している。

各種取り組みに際しては、若者である会員の発案をプロジェクトとして集約し、自治会に合議、了承を得た上で、取り組みを具体化していることから、集落内の各世代間の意識をつなぐ仲介役としての機能も有している。

その他にも、サテライトと呼ばれる高齢者への給食事業等を行っている「女性部」や、集落の未来の担い手である子ども達の健全育成を図るために組織された「田代子ども会育成会」などが、活発に活動を行っている。

(4) むらづくりの農業生産面への寄与状況

ア 持続的かつ安定的な農業生産活動の体制整備

田代集落では、水底まで見える青く澄んだ水を湛える「陣の池」の豊かな湧水を用水源として、「ヒノヒカリ」等の水稻栽培が盛んに行われてきた。

しかしながら、地区内の農家構成は、第 2 種兼業農家や自給的農家の小規模経営が多くを占め、ほ場についても、傾斜地での水持ちを確保するため、不整形の狭小田に各戸の持ち分が散在しており、生産効率が極めて低いという課題があったため、平成 4 年度から「中山間地域農村活性化総合整備事業」に取り組み、農業基盤の整備と所有区画の整理を行った。

この基盤整備等により、通作距離の短縮等作業効率の向上が図られ、事業前には、市の平均農業所得の 7 割程度であった集落の平均農業所得も、現在では市の平均並の水準となっている。（田代集落農業所得推移：H2・1.64 → H22・1.8（百万円））

さらに、平成 19 年度から開始した「農地・水環境保全向上対策」への取り組みを通じ、地区内の資源は全て地区住民の財産であるとの考えのもと、今後の地域高齢化に対応するための環境づくりを進めようとする気運が高まり、農作業受委託の窓口・受け皿として、同年 10 月に「田代農用地利用組合」が組織された。

現在、5 名のオペレーターにより、水稻、飼料作物等を中心に、植付、収穫、畦畔管理等の受託に取り組んでおり、その面積は年々拡大している（作業受託面積 H

19：延べ1ha → H24：延べ8ha)。

農家の営農、景観保全への意識の高まりもあり、現在のところ、地区内には目立った耕作放棄地は確認されていないが、これまで将来の営農継続に不安を抱えていた高齢農家等にとっては、地区内の農作業委託先が明確になったこと、また、受託作業に従事するオペレーターも若者が多く、5～10年先を見通した農業経営に目処が立つことから、将来への安心感を与える存在となるとともに、地域農業の担い手として中心的な役割を果たしている。

イ 地域ぐるみでの農業用施設管理の取組

「中山間地域農村活性化総合整備事業」の実施を契機に、農業者間の結束が強まり、農地や農業用施設の維持保全活動は活性化したものの、保全管理活動は農業者が行うべきものという考えが根深く、非農家との交流は皆無であった。

しかしながら、徐々に農業従事者が高齢化する中、これまでの農業者単独での保全管理活動には限界が生じつつあり、このままではいけないという住民個々の思いが募っていた。

このような中、事業制度開始をきっかけとして、平成12年度から「中山間地域等直接支払制度」に、また、平成19年度からは「農地・水・環境保全向上対策」への取り組みも開始した。

取組開始当時は、非農家の理解を得ることが難しかったが、自治会活動などを通じて、集落にとっての施設管理の重要性等を地道に説明することにより、集落内の資源はすべて集落住民の財産であるとの認識が高まり、現在は、農道や水路の整備、周辺隣地の草刈等、一人では困難な保全管理活動を集落住民総出で実施している。

今では非農業者等も積極的に話し合いに参加し、様々な協力体制のもとで農村環境の保全や耕作放棄地の発生防止に積極的に取り組んでいる。

ウ 今後の農業を支える後継者の確保

田代集落の認定農業者は、平成19年の4経営体から現在では13経営体となっており、うち11経営体には後継者がおり、うち、5経営体では既に20代から40代の後継者への経営移譲がなされている。

後継者の中には、経営移譲以外にも、機械オペレーター等の農作業受託会社を立ち上げるなど、新たな経営展開を図る例もある。

また、異業種から農業に参入した若者もおり、自分で営業を行って販路を開拓するなど、新しい風が吹いているところである。

これら、新しい農業の展開については、「ひまわりロードプロジェクト」の中で「遊び」のアイデアと渾然一体となった「夢」として語られることで、仲間に共有され、広がっていくことが、田代集落のむらづくりの大きな特徴となっている。

さらに、最近では、えびの市において開催されたグローバルGAPに関する講習会に、集落の若手後継者が3名出席するなど、若者を中心とした地域間競争力の向上、安全で信頼性の高い農産物の提供等を念頭に置いた新しい動きも始まっている。

エ 口蹄疫の発生と復興

前述のとおり、平成22年4月に宮崎県内で口蹄疫の発生が確認され、当集落においても、わずか7kmしか離れていない近隣集落牛舎で疑似患畜が確認されたことから、発生農場から半径10km以内の移動制限区域となり、家畜やえさ、資材等の畜産業に限らず、他の農業生産活動や人々の交流も制限されることとなった。

当時は、粗飼料の収穫や稲作の堆肥散布時期であったが、これら農作業の取り止めや外出の自粛、各種イベントの中止等を余儀なくされ、一時、集落は物々しい雰囲気に包まれた。

このような中、「県民総力戦」の旗印の下、田代集落においても、集落総出により消石灰散布等の懸命な防疫作業に取り組み、同年6月には、清浄化が確認された。

現在は、復興に向けた取り組みが行われているものの、当集落でも、約3ヶ月にわたる受精作業自粛による受胎率の低下や出荷量の減少といった影響が色濃く残っている。

しかし、これまでのむらづくり活動で培われていた集落の団結力は、この非常事態においても遺憾なく発揮され、集落一丸となった防疫作業の実体験や、非農業も含め全ての産業が密接な関わりを持っていることを肌で感じた結果、「我が集落は、集落住民皆で守る」という認識が口蹄疫発生以前より一層強まっている。

現在も、県が定める毎月20日の一斉消毒の日には、集落を上げての防疫作業に取り組んでいる。

(5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア 集落を愛する若者たちによる情熱あふれる様々な活動

田代集落の若者は、就職などのために集落外に居住している者が多かったが、子供の頃、自分たちのために運動会や祭りなどの行事に一生懸命に取り組んでくれた親の背中を見て育ったことから、自分たちも同じような活動をしたいという気持ちを持っていた。

その若者たちが、ここ10年ほどの間に、自分たちの子どもも田代の豊かな自然の中で育てたい等の気持ちから田代集落に帰ってきて、「農地・水環境保全向上対策事業」などに参加するようになった。

そうした若者たちの姿を見ていた自治会長の「若いもんたちで何かやってみらんか」という一言をきっかけに開催した、集落の若者全員が集まった飲み会の際、「若手だからこそできることがあるはず」「取り組む以上は、もっと自分たちも楽しみたい」といった発言があり、内に秘めていた想いを爆発させた若者達の団結が実現した。

それをきっかけに、意欲的な話し合いが開始され、平成21年に、若者の連携と世代間交流の促進、地域活性化への取組を目的とした「ひまわりロードプロジェクト」が結成された。

『「楽しい」と思ったことは、「すぐに」、「できることから」、「まずは」やってみ

る、でも、「背伸びはしない』をモットーに、その名のとおり、地区内の農道や農業用施設へのひまわりの植栽を行い、また、平成 22 年からは、30 年ほど前に途絶えていた集落の夏祭りを復活させようと「ひまわりロードまつり」を開催し、転作田にひまわりで制作した迷路でのタイムトライアルレースが子どもたちの人気となっている。

レースの参加者は、平成 21 年度の 18 名が平成 24 年には 46 名（祭り全体の参加者は約 300 名）に増えるなど、集落内はもちろん、集落外からも多くの参加者が訪れ、他地域との交流の大きなきっかけとなっている。

さらに、この祭りや、ひまわり畑で「ひまわりロードプロジェクト」のメンバーの結婚式を行ったことなどが新聞に度々取り上げられ、「田代集落」という農村居住のあり方の発信にも一役買っている。

また、ひまわりロードプロジェクトの発足・活動の開始を機に、集落住民に広く活動の内容を知ってもらおうと、平成 21 年 9 月から毎月 1 回、「公民館だより」を発行しており、現在、通算第 47 号まで発行されている。

ひまわりロードプロジェクトの事務担当者が、集落内外の催事に参加した集落住民から記事を収集、編集し、自治会長が最終校正を行った後、集落内の 8 つの班に回覧されている。

記事の内容は集落内外の細かな時事情報で、集落の高齢者等からも「今田代がどうなっているのかよく分かる」といった意見も多く、住民間の会話のきっかけとして、また、集落内の合意形成等にも大きな役割を果たしている。

その他にも、祖父母世代との交流を深めるための、集落内で生産されたそば粉や野菜を利用したソバ打ち大会などを実施し、より一層、集落内の連携、世代間の交流を図っている。

さらに、平成 22 年からは、新たな地域資源を活用しようと、ひまわりの種から食用油を搾油する取り組みも行っている。

選別・搾油・瓶詰め of 全行程を集落住民自らが手作業で行い、完成したものは、まだ、ひまわりの作付面積も少なく、搾油量も限られることから、取組の周知や活動の成果を実感してもらうため、住民へ無償で配布を行っている。

また、農業後継者育成のための取り組みの一環として、集落内の児童にこの搾油作業を体験させることで、食物のありがたさや農業に対する感謝の意識を醸成させる食育活動も実施している。

加えて、BDF（バイオディーゼル）活用に向けた試みとして、ひまわり油の廃油を回収し、精製したサンプル油をイベント時の発電機燃料として試験的に利用するなど、環境に配慮した取組も行っている。

イ 地域の資源を守り続ける心の世代を超えた継承

前述のとおり、当集落の成り立ちは、その起源となった集落内に湧き出る豊富な湧水が、農業用水だけでなく、生活飲用水としても集落住民に恩恵を与えていたため、古くから「水」に対する感謝の念は強く、「水を保全する意識」は、職業を問わ

ず、集落住民に共通した至極当然のものであった。

そのような中、近年、「陣の池」の湧水がパワースポットとしてテレビで取り上げられるなどして注目を集め、地区外からの来訪者が増加するといった新たな状況も生じている。

この「水」の恵みに感謝し、地域資源を住民全員の財産として目に見える形で表すためのシンボルとして、平成24年に、集落内の水路沿いに水車の建設を行った。

建設にあたっては、住民から資材提供を受け、集落内技術者からの指導を仰ぎつつ、住民の手作りで完成させ、平成25年にはこの水力を利用した小水力発電による防犯灯の設置も計画している。

その他にも、前述の「天宮隧道」は、現在では改修が追いつかず送水を止めている状態であるものの、先人によって築かれた貴重な地域資源として、継承・保存の方策を模索中であり、また、集落に存する「田の神さあ」は、誰ともなく管理を行い、絶えず花が供えられるなど、地域の資源を守り続ける気持ちが脈々と受け継がれている。

ウ 集落の生活観を具現化する伝統文化の継承

当集落では、「十五夜祭」や「竹はしらかし」（竹で組んだやぐらに火を付け、正月飾りや古くなったお守りを焼く正月の厄払いの行事）等、旧薩摩藩で見られた行事が現在でも数多く受け継がれているが、中でも、五穀豊穰を祈願する祭りとして、隣接する今西集落の「香取神社」と田代集落の「天宮神社」の合同で行われる「打植祭^{うちえ}」は、平成13年に宮崎県無形民俗文化財に指定された貴重な伝統行事である。

少子高齢化の進行により、伝統の継承が危惧されていたが、「ひまわりロードプロジェクト」を仲介役として、高齢者クラブや子ども育成会など、関係団体が密接に協力関係を築き、記録映像の保存や、甘酒、しめ縄づくり等の技能継承など、集落全体で、この祭りの伝承活動に取り組んでいる。

高齢者の話によれば、この他にも、当集落には兵児踊りや鎌踊りなどの郷土芸能も過去には伝承されていたとのことであり、今後は踊りの内容について随時調査を行い、郷土芸能の復活に向けて取り組んでいく予定である。

このように、伝統文化を継承していく活動が、集落の一体感と世代間の親交を深め、集落活性化の要因の一つとなっている。

4 むらづくりの特色及び所見

(1) むらづくりの特色

① 持続的かつ安定的な農業生産活動の体制整備

古くから、豊かな湧水を利用して水稻栽培が盛んに行われてきた田代集落であるが、ほ場は区画も狭小で、地区内に散在し、生産効率が低かったため、市内の他地域に先駆け、平成4年度から「中山間地域農村活性化総合整備事業」に取り組み、農業生産基盤及び生活環境基盤の整備を一体的に行った。

また、「農地・水・環境保全向上対策」等への取り組みを通じ、地域ぐるみの保

全体制が確立され、非農業者等も積極的に参加する地域活動が実践されている。

さらに、これらの取り組みを契機に、農作業受委託組織として「田代農用地利用組合」が設立され、地域農業の担い手として中心的な役割を果たすなど、種々の努力によって、将来にわたり農業生産活動を維持するための体制整備が行われている。

これらの体制を基礎としながら、「ひまわりロードプロジェクト」の若手農業者を中心として、作業受委託、園芸・畜産の推進などの新たな農業が展開されつつある。

② 集落を愛する若者たちの情熱あふれる様々な活動

集落の若者達が団結し、結成した「ひまわりロードプロジェクト」の活動が、農業生産面・生活環境面の双方で、集落の活性化に大きく寄与している。

「ひまわりロードまつり」の開催等による他地域との交流、「公民館だより」の発行による地区内への情報発信、合意形成への寄与、ソバ打ち大会の開催による集落内の連携、世代間の交流、「水」への感謝の想いを形にした水車の建設等の種々の活動を行うとともに、構成員個々は、地域農業の将来を担う中心経営体や集落営農組織における作業受託者であり、地域農業の中心的役割を担っている。

各世代間、各組織間のパイプ役として、集落の一体感の醸成に大きく寄与し、田代集落を牽引する存在となっている。

③ 地域の資源を守り続ける心の世代を超えた継承

集落内に湧き出る豊富な湧水を集落の成り立ちの起源とすることから、古くから、農家・非農家に関わらず集落住民に共通する認識として、「水」に対する感謝の念が継承されており、「陣の池」や「天宮隧道」の保全、水車の建設などを行い、地域資源を守り続ける活動を行っている。

また、「田の神さあ」への信仰心や、「天宮神社」に伝わる「打植祭」の若者への伝承など、郷土を守ろうという世代を超えた共通の価値観に基づく活動が行われている。

(2) 所見

当集落のむらづくりにおいて特筆すべき点は、陣の池、天宮神社や用水路、ほ場といった、集落の営みを形づくる地域資源の守るべき価値を峻別・助言できる老年世代と、新たな発想で農村生活に楽しさや豊かさをもたらす若年世代が相互に影響しあい、特に若年世代の情熱的な取組が原動力となって、農業の活性化、若者の定住化等につながっていることである。

田代自治会では、湧水を大切にするという集落としての強い認識の下、地域の基軸である農業生産活動を維持するために、他地域に先駆けた事業への取組を通して、農業生産活動の体制整備が行われている。

また、他集落から帰ってきた若者達が団結し結成した「ひまわりロードプロジェクト」の活動による他地域との交流、地区内外への情報発信、合意形成への寄与、集落

内の連携、世代間の交流の広がりなどは、現在の集落の諸活動の中が活発化する原動力となっている。

一方、地域の成り立ちの起源である「水」に対する感謝の念や「田の神さあ」への信仰心、伝統文化の継承等については、郷土を守ろうという世代を超えた共通の価値観による活動と言える。

少子・高齢化という社会構造の急激な変化の中、守るべき価値観を共有しながら、新たな発想を大切にし、集落を構成する年配者と若者、女性が、同じ距離感で活動に取り組んでいる「田代自治会」の集落運営は、全国のむらづくり活動のモデルになり得るものである。

5 最優良とする理由

多くの地域で、様々な手法によりむらづくり活動が実践されているが、その多くは、単一世代がその信念に基づき牽引していく取り組みであるのに対し、本事例では、集落の若者が活動の中心になりながらも、世代間、組織間のパイプ役となり、これまで継続されている活動と新たな活動を融合した、いわば新しい価値を創造する取り組みを行っている。

将来にわたるむらづくり活動の継続と発展が大きく期待できるものであり、後継者確保に窮する農村集落における、今後のむらづくり活動の手本となり得るものと考えられることから、最優良事例として推薦するものである。